

2015年1月4日 主日礼拝説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書7章18～23節

説教「来るべき方」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松 牧人

洗礼者ヨハネは来りつつある救い主を力強く宣べ伝えた預言者でした。しかし、そんなヨハネがどうして主イエスのところに弟子たちを遣わし、「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」と尋ねたのでしょうか。ある人は、生まれる前から主イエスと密接な関係を持っていたヨハネが、主イエスに対してこんな質問をするわけがないとし、これはヨハネの質問ではなく信仰告白であったと言います。実際、この文章は「あなたこそ来るべき方です。他の誰を待つことがありますか」と訳すことができるのです。またある人は、ヨハネの質問は自分のためではなく、弟子たちを教育しようとしているのだ、つまり、本当に従って行くべきなのは自分ではなく主イエスなのだということを分からせようとして、ヨハネは自分の弟子を主イエスのところに遣わしたのだということです。

これらの解釈はそれなりに魅力的な解釈です。けれども私たちは、主イエスが宣教を始められたのに、なお苦境におかれたままであったヨハネが、やはり迷い、悩み、動揺し、そのような状況の中でヨハネが問わずにおれなかったものであったと読むべきではないかと考えます。ヨハネは主イエス・キリストの優れた証人でした。しかし、どんなに優れた証人でも、人間である限り悩み、苦しみ、信仰の危機を経験することがあります。

私たちは聖書の中で偉大な信仰の先輩たちの話を読みますが、その中で心弱らなかつた人がいるでしょうか。嘆き訴えることをしなかつた人がいるでしょうか。たとえば、モーセも、エリヤも、エレミヤも、時に死を願うほどに神に訴え祈ったのではなかつたでしょうか。ヨハネは、主イエスが御業を始められたと聞きつつも、まだ革新的なことは何も起こっておらず、ヘロデは依然横暴な支配を続けていて、自分も獄中で苦しみ続けている、そんな事態をどう考えたらよいのか、主イエスご自身のお言葉を求めたのでした。

主イエスはヨハネの問いを受け止めてくださいました。ヨハネの動揺をお笑いにはなかつたのです。主イエスはヨハネの弟子たちに答えて言われます、「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病の人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである」（22、23節）。これらの出来事は、預言者たちが終わりの日に救い主が到来するときに起こるしるしとして告げていたものです（イザヤ35章5～6節、61章1節ほか）。そして、主イエスが活動を始められた今、これらの事柄は町々村々で実際に起こっていたのです。

しかし、こうした主イエスの答えはヨハネの問いに対する正面からの答えにはなっていないように思われます。これらのことが起こっていることは、ヨハネもすでに弟子たちから聞いて知っているのです。けれども、自分はなお獄に囚われたままであり、命の危険に

さらされているのです。「主よ、あなたはこの私を助けてくださらないのですか」との問いにはまだ何も答えられてはいないのです。そんなヨハネの切実な問いに答える言葉があるとすれば、それは最後に主イエスが言われた一言ではないでしょうか。「わたしにつまずかない人は幸いである」(23節)。

いったいヨハネも陥りそうになっているつまずきとは何でしょうか。それは主イエスのあまりの低さということではないでしょうか。ヨハネは救い主の到来と共に迫る神の厳しい裁きの到来を告げていました。そのヨハネにとって、来るべき救い主のイメージは、もっと速やかに力強く悪をなぎ倒し、この民を異教の勢力の支配から解放し、自分を牢獄から解放してくださる方というものではなかったでしょうか。それなのに、伝え聞く主イエスの姿は、あまりにも低く、貧しく、弱く、神の御業の進展はあまりにも遅いと思われたに違いありません。そんなヨハネに対して、主イエスは「わたしにつまずかない人は幸いである」と言われるのです。

福音にはいつもこうしたつまずきがあります。主イエスが進みゆかれる苦難と十字架の道は、私たちの常識的な神のイメージからすればつまずき以外の何物でもありません。パウロが言うように、十字架の言は愚かなのです(コリント一 1:18)。世の人々の目にはばかばかしく映るのです。しかし、神は御子の苦難と死によって私たちの罪を贖い、私たちを神との交わりの中に立たせようとしてくださいました。そこに神の不思議な救いのご計画がありました。私たちは主イエスの福音の愚かさをしっかりと聴き取らなければなりません。私たちの甘い期待や思い込みを超えた主イエスの御言葉と御姿に耳を傾け、目を注がなければなりません。

つまずきと言う言葉を、もっと人間的な次元で口にしたり、耳にしたりすることがあります。あの人の言葉につまずいたとか、教会につまずいたと言うのです。けれども、それらも突き詰めて考えるならば、主イエスに対するつまずきに通じるところがあるのではないのでしょうか。自分のイメージや期待と違うとって失望しているのです。しかしそのとき私たちは、欠け多く愚かな者たちのために関わってくださる主イエスご自身の低さを見失っているのです。

「わたしにつまずかない人は幸いである」と主イエスは言われます。これは断罪の言葉ではありません。私たちのところに来たりつつあるお方、すでに来てくださったお方の招きの言葉なのです。この私を見続けなさい。ここにあなたの救いがあると主イエスは招いてくださいます。主イエスを信じて生きる信仰の道、それは主イエスご自身が言われたように、狭い門から入り細い道を行くようなところがあります。それを見出す者は決して多くはないのです。しかし、あなたは私の罪の赦しのおとずれを聞き、私が備えたいのちの道を歩み続けなさい、と主イエスは言われるのです。